

日本語の接尾辞「的」の機能について：「的」付き ナ形容詞が文全体及び文章に与える影響

王，娟
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494634>

出版情報：比較社会文化研究. 19, pp.21-27, 2006-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



日本語の接尾辞「的」の機能について

—「的」付きナ形容詞が文全体及び文章に与える影響—

オウ
王

ケン
娟

1. はじめに

第二言語習得の分野において日本語の接尾辞「的」が一つの習得上の困難点としてよく指摘されてきたが、先行研究には不明な点がまだたくさん残っている。例えば、「～的な」と「～の」の相違に関する研究である。つまり「的」付きナ形容詞¹の語基には、家族・時代・社会など、連体修飾の場合「～的な」だけではなく、「～の」も取る語群が存在している（本稿では、「社会の変化」、「時代の流れ」のような構文を「AのB」に表示する）。これに関して日本語母語話者は無意識に両者を使い分けている。しかし、中国語に訳す場合、「時代的な変化」でも、「時代の変化」でも「時代（的）変化」という1つの訳になってしまう。中国人日本語学習者は、母語の影響もあり、「的」付きナ形容詞と「AのB」の使い分けを正確に把握するのは非常に難しい。また実際の使用状態では、「的」付きナ形容詞と「AのB」の使い分けによって、文の意味を理解する上で違った役割があるのだろうか。あるとすればどのような役割だろうか。日本語教育の面からも、これらの問題を探求する必要があると思われる。

王(2004)は、語基の文法的特徴及び意味的特徴から「的」の機能について考察を行った。本稿は、語用論の前提において、王(2004)の考察結果を踏まえて、上述の問題を解決するにあたって有力な手がかりを与えてみたい。例文は、朝日新聞東京本社発行の朝刊のオピニオン²の投書欄「声」(2001年1月1日から2001年12月31日まで)に基づき筆者が作成したデータベース（以下、「朝日新聞『声』2001」と略す）から引用する。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

日本語の接尾辞「的」に関する先行研究は、主に次のような視点から調査と考察が行われた。

①藤居(1957)と藤居(1961)は、接尾辞「的」の曖昧

さ、無規則性及び濫用されている現象について検討している。

②山田(1961)、原(1986)と堀口(1992)は、接尾辞「的」の歴史的な発生について述べている。

③接尾辞「的」の意味と用法に関する論述は、主に二つの研究の視点から行われた：遠藤(1984)と原(1986)は、意味論の視点から語基の意味的特徴及び「的」が表す意味を述べている。加納(1991)は、品詞論の視点から語基について分類を行った。

④他の言語との対照比較は、二種類ある。遠藤(1984)と原(1986)は、日中対照の視点から考察を行った。藤居(1961)は、英語の訳文に使われている「的」のはたらきについて言及している。

⑤使用の実態調査としては、90年代に入って盛んになった南雲(1994)、丸山(1997)、山下(1999)と羅(2001)などがある。これらは主に量的調査であった。

以上の先行研究では、さまざまな分析や分類が示されていて、とても参考になる。しかし、今までの先行研究には、考察対象が、全て接尾辞「的」に前接する語基に集中しており、「的」付きナ形容詞が、文中での用法、文全体との関連は、十分にはされていない。藤居(1961: 83)は、「的」付きナ形容詞に関して、語基が変わらなくても、異なる文の中で性質を変えて機能しており、担う意味も違ってくることもあると指摘している。つまり、接尾辞「的」を把握するには、文全体を無視して、語基と「的」の部分だけや「的」と後続語の部分だけを取り上げて説明しようとしても不十分だと言えるであろう。しかし、この問題について、藤居(1961)は、ただ現象として指摘したが、分析と考察を行っていない。また、「日本語教育の立場からこのような漢字の接辞的用法を考える上で重要なのは、その造語ルールや意味ばかりでなく、文中での用法を知ることである。」と加納(1991)も、この問題点の重要性を指摘したが、やはり課題のまま残されている。本稿は、「的」付きナ形容詞と「AのB」の対照比較を行う上で、これらの問題を解決

1 王・曲・林(2001)は、「一般的な」「社会的な」のような接尾辞「的」の付くナ形容詞を「的」付きナ形容詞とし、「簡単な」「大切な」のような「的」の付かないナ形容詞を非「的」ナ形容詞とした。以下この定義にそって分析する。

にあたって有力な手がかりを与えてみたい。

3. 考察

3-1. 王 (2004) の考察結果に関する概略

本稿は、王 (2004) がまとめた結果を踏まえて、「朝日新聞『声』2001」の実例を引用しながら接尾辞「的」を使う文全体の特徴を分析したいと思う。ゆえに、考察に入る前に、王 (2004) の分析経緯及び考察結果を概略しておく。

王 (2004) の考察により、接尾辞「的」の機能を次のようにまとめることができる：①語基と対立し存在するもう一つの相手を否定し、語基の特性を強調すること、②語基の品詞を変える、もしくは語基に新たな意味を付け加えるか語基の意味を変えること、③非「的」ナ形容詞と比べると、「的」付きナ形容詞は語基と後続語との関係が不安定で、関連が弱い。

まず、「語基と対立し存在するもう一つの相手を否定し、語基の特性を強調する」という特徴に関して述べておく。王 (2004) によると、「的」付きナ形容詞の語基には「もう一つの相手」が存在することが常である。例えば：「精神的な」に対して「物質」という相手があり、「積極的な」に対しては「消極」がある、「経済的な」に「政治」がある、「一般的な」に「特殊」がある。この特徴は、語基が名詞の品詞だけをもつ場合により鮮明である。さらに、「存在するもう一つの相手」とこの語基は、「排反関係」²、「反意関係」³、「系列的関係」⁴の中において、少なくとも一つの意味関係において対立するという傾向がある。次に例を挙げてみる：

例1、「女性的なところ」(相手は、「男性」と考えられる)

「男性らしい特徴と比べると、やさしくておだやかなさま」と表現したいのである。「女性」は、「男性」と「排反関係」になる。

例2、「具体的な対策」(相手は、「抽象」と考えられる)

「抽象的な提案ではなく、实际的で、細かい所まで取り上げる対策」と解釈できる。ここでは、「具体」と「抽象」は、「反意関係」の意味関係として対立している。

例3、「世界的な視野」(相手は、「地域」と考えられる)

「自分の周り(世界と対照して自分が所属している地域)に限って考えるのではなく、世界全般にわたって考える」と表現したいのである。ここでは、「世界」と「地

域」は、「系列的関係」になる。

次は、接尾辞「的」は、語基と結合する時「語基の品詞を変える、語基に新たな意味を付け加えるか語基の意味を変える」という機能について考える。この特徴は、国立国語研究所の『分類語彙表』(1964)に出現した漢字二字熟語及びその漢字二字熟語を「的」と結合する場合の意味分類を調べたことによって分かったものである。例を挙げて説明する：

例4、「経済」と「経済的」

「的」の付く前後の意味分野は変わらず、同じ「経済・収支」に関する意味を表す。ここで、「的」の機能としては、語基の品詞を名詞からナ形容詞に変えて、後続語を修飾する。

例5、「女性」と「女性的」

「女性」は、ただ「男女」か「生物」など単純な「性」という概念の意味を表している。一方、「女性的」は、それだけではなく、「柔和、やさしい、おだやか」という特徴を抽象化して、その意味を持って「女性的景観」のように無生物まで修飾できる。つまり、「的」が付くことによって、「景観」のような無生物を修飾できるようになる。修飾される名詞の意味領域が広がったとともに、形態統語的領域も広がった。

例6、「衛生」と「衛生的」

『分類語彙表』によると、「衛生」は、仕事類の「医療」に分類されているが、「衛生的」は、仕事類ではなく「衣食住」という項目に分類されている。接尾辞「的」の添加によって、ことばの意味分類を変える。

最後は、「非『的』」ナ形容詞と比べると、『的』付きナ形容詞は語基と後続語の間の関係が不安定、関連が弱い」についてである。「健康な」と「健康的な」を対照してみると分かると思う。例えば、「健康な人」のような「健康な+後続語」には、後続語が健康の主体であり、その主体自身の現状について健康かどうかを判断するのである。語基と後続語の関連は、直接的で単純だと考えられる。一方、「健康的な生活」のような「健康的な+後続語」には、後続語が健康の主体ではなく、その「後続語」によって別に存在している主体(生活している人間など)の健康の目的を達するのである。つまり、語基と後続語の間にはもう一つ考え

2 「排反関係」というのは一方を肯定することによって他方が必然的に否定される場合をいい、そのような関係にある言葉の一方を肯定しておきながら他方も肯定したり、双方を否定したりすると矛盾が起こるので、論理学では「矛盾」と呼ばれている(柴谷・影山・田守(1982:55))。例：「女性」と「男性」

3 …反意語の場合は、一方を否定したからといって必ずしも他が意味されないという性質を持っている。…反意関係は一般に或る尺度を表現する語、つまり比較表現の可能な語に見られる(柴谷・影山・田守(1982:56))。例：「一般」と「特別」

4 階層を持つ対立の1つは「系列的関係」である(柴谷・影山・田守(1982:59))。例：「社会」と「家庭」

ないといけな要素が入ってくる。次に「健康的な人」と「健康な人」の例を比較してみる。「健康な人」と比べると、「健康的な人」の方は、断定の度合いが低く、表面的に健康そうに見えるが、実際に100パーセント健康ではなく何か病気を隠している可能性もある。王（2004）の日本語母語話者に対する使用意識調査⁵でも、非「的」ナ形容詞は断定か現実になったのを表現しているが、「的」付きナ形容詞は後続語との意味関係が断定より不安定な要素を含んでおり、話し手個人の理想を表現することで、ある程度の主観性を表すという特徴が指摘できる。

これらの機能を考慮すると、実際の使用状態において「的」付きナ形容詞と「AのB」の使い分けを行うことによって文の意味はどのように変化するのだろうか。次の節から「朝日新聞『声』2001」の例文を引用して考察を行う。

3-2. 使用実態から見る「的」による影響

本節は、「朝日新聞『声』2001」の例文を引用して、日本語接尾辞「的」の使用実態を考察する。語用論的前提において接尾辞「的」による文の意味に対する影響を探究してみたい。その前に柴谷・影山・田守（1982）が指摘した「会話の含意」の特徴について言及する。

接尾辞「的」のあいまいさだけではなく、日本語のあいまいさもよく指摘されている。つまり日本人は口に出さず以心伝心でコミュニケーションを行うことが多い。口から発せられる言語は伝達しようとするものの骨組だけを伝え、肉の部分は聞き手が読みとって行くのである。これが「言外の意味」、即ち「会話の含意」であり、次のような特徴をもつと柴谷・影山・田守（1982：131、132）が指摘している。

- ① 会話の含意は言語表現自体の意味には含まれない。
- ② 同じ表現から、会話の場面に応じて不特定多数の含意が得られる。
- ③ 会話の含意はキャンセルすることができる。
- ④ 会話の含意は、会話の当事者が特定の状況で行う推論によって得られる。
- ⑤ 会話の含意は、④の推論に加えて、会話当事者の心づかい・配慮に依存する。

さて前節に述べた王（2004）でまとめた「的」の機能は、実際の使用状況において以上の会話の含意をどのように表現しているのかを考えてみる。

王（2004）は、「的」によって「語基と対立し存在するもう一つの相手を否定し、語基の特性を強調する」と述べて

いる。「朝日新聞『声』2001」の例文を考察すると、その特徴については次のように考えられる：「的」付きナ形容詞の語基や「語基と対立し存在するもう一つの相手」は、よく「会話の含意」を提示するキーワードとして表している。そして、「語基と対立し存在するもう一つの相手」は、必ずしも「的」が使用されるその文に現われないが、よく「的」が使用される文の前後に出てくる。一方、「AのB」の例文には、このような傾向が見られない。「的」付きナ形容詞の例文を見てみる。

例7、しかし、外国人作業員の滞在は長期化しがちで、家族の呼び寄せなどから社会的な課題も生まれやすい。
（20010124）⁶

原文は、次のように示す。

外国人労働者、政治の利権に（声）

無職 斎藤一郎（横浜市 62歳）

財団法人「ケーエスデー中小企業経営者福祉事業団」（KSD）疑惑の広がりを見ていると、自民党政治のわい小性、政治意識の退廃などにかく然とする。

KSDの関連団体に中小企業国際人材育成事業団（アイム・ジャパン）がある。外国人研修生を受け入れて、会員企業に派遣しているが、これはいわば「官製人買い」にも見える。これらは民間事業団だと言い訳は、派遣国、研修生自身には通用しないのではないか。国が認可した公益法人であり、政権党の有力な政治家が関与してきたとされる。

バブル絶頂期、人手不足に悩む建設業界が外国人作業員受け入れに動き、官民合同の視察団が英国などを訪ねた。しかし、外国人作業員の滞在は長期化しがちで、家族の呼び寄せなどから社会的な課題も生まれやすい。「単純労働者の移入は無理」が政府各省の結論だった。

KSD側は、そうした議論を回避し、体裁のいい「研修生」の名目で安い外国人労働者の移入を図り、中小企業支援をアピールした。自民党は金と票を手にしたということだろう。

受け入れ企業は一人当たり月十八万円を払い、研修生は一年目の場合、生活費などとして八万円を受け取る。しかし、こうしたやり方は長い目で見た場合、派遣国や研修生に感謝されず、日本人のずる賢さだけが記憶されることにならないか。

5 王（2004）は、「健康」と「平和」の用法と意味に関して、日本語母語話者に対するアンケート調査を行った。アンケート用紙は、選択式の問題と自由発言という二つの部分を含む。有効回答数は24名であった。

6 2001年1月24日に載った文章であった。

ことはグローバル経済下の国際問題だ。政府本来の仕事と言っていい。ルールをまず確立すべきだと思う。

以上のように、原文は主に日本の中小企業に派遣する外国人研修生制度による政治的な問題について議論した文章である。その中に、政治の利権など政治的な問題だけではなく、例文のような「社会的な課題」もあると述べたものである。「政治」と「社会」は、この文章が議論する話題の核心だと考えてもよいであろう。「政治」は語基の「社会」と対照し存在するもう一つの相手としてタイトルと本文に出てくる。

もう一つの例を考えてみる。

例 8、金のないつらさ、経済的な基盤が確立していない時の不安をいやというほど味わった。(20010326)

原文は、次男の自殺で今まで子供たちの経済的な状況ばかりを注意して、心理的な問題を十分重視していなかった母親の反省の文章であった。例 8 の例文自体では、「経済」と対立し存在する「相手」の「心理」が見えないが、もし読者は、もう一つの相手の存在があるという意識を持って文章を読んでいけば、作者の本意をもっと読み取りやすいのではないかと考える。ここも、「心理」と「経済」によって文章の中心的な含意を示している。

ここでは、一つ述べておきたい現象がある。つまり、同じ語基でも異なる文章に使われるともう一つの「相手」は必ずしも同じではなく、そのつど変わることがある。例 7 の中では語基「社会」の「相手」は「政治」であると先に述べたが、次の例の中では、その「相手」は「政治」ではなく、「科学」「技術」である。

例 9、コンセンサス会議が、技術を推進する隠れみものになっては困りますが、イーター⁷について市民も参加する形で論議の場をつくり、社会的な合意の形成に努めてはどうでしょうか。(20010210)

また、「的」付きナ形容詞の例文を考察すると、もう一つの特徴が分かった。つまり、文の意味の中心は述部ではなく、「的」付きナ形容詞の部分が表す情報である。この特徴について、次の「AのB」の例10と対照してみれば分かると思う。

例 7、しかし、外国人作業員の滞在は長期化しがちで、家族の呼び寄せなどから社会的な課題も生まれやすい。(20010124)

例10、自民政権が社会の変化に適切に対応しなかった結果だ。(20010105)

例10を引用した原文は、「違いを競わず、野党は連立を新世紀に選ぶ」というテーマである。主に「自民党にとって、野党のつぶし合いが何にもまして政権の長期化を助けたに違いない。野党は『違い』と同時に連立構想の具体策を明示し、実行して欲しい」という政治についての立場を述べている文章である。原文全体の背景から考えても例文自体の意味を考えても、例10の意味の中心は「社会の変化」ではなく、「対応しなかった結果」だと言える。一方、同じ「社会」であるが、例 7 の文意の中心は述部の「生まれやすい」ではなく、もう一つの「相手」の「政治的な課題」と対照する「社会的な課題」その課題の性質を強調したいのであろう。

ここまでの分析を整理してみる。「会話の含意」の特徴に述べたように、「的」付きナ形容詞により発生する含意は言語表現自体の意味には含まれないが、口から発せられない言語の「肉の部分」としては聞き手に伝達しようとされている。場合によってこの含意はキャンセルすることができる。さらに同じ「的」付きナ形容詞の表現から、会話の場面に応じて不特定多数の含意が得られる。

しかし、「同じ『的』付きナ形容詞の表現から、会話の場面に応じて不特定多数の含意が得られる」という特徴に対して、日本語母語話者はどのようにこの「不特定」「多数」の状況から正確な含意を把握するのであろう。柴谷・影山・田守(1982:133)は、「会話の含意は、会話の当事者が特定の状況で行う推論によって得られる」「会話の含意は、(特徴)④の推論に加えて、会話当事者の心づかい・配慮に依存する」と指摘している。が、日本語母語話者が適切に行う推論や心づかいが、日本語学習者にとって非常に難しいことだと思われる。さて第二言語習得の場合に、日本語学習者に提示できる「推論」の糸口はあるのであろう。

「朝日新聞『声』2001」の例文を考察すると、次のような傾向があると分かった。つまり例文には語基の強調する特性について解釈したり、提示したりする部分がよく現われている。「的」付きナ形容詞の語基が同じでも、異なる文章に使われると語基と対照するもう一つの「相手」は必ずしも同じではない。同じ「的」付きナ形容詞でも、表す「会話の含意」がそのつど変わることがある、と前述した。「的」付きナ形容詞のこの不特定性を限定するために文中ではその語基で伝えようとする「会話の含意」に関する解釈が提示の部分がよく見られる(本稿では、論説の便宜のために、

7 イーター=ITER(国際熱核融合実験炉)

このような解釈が提示の部分を「提示する部分」と呼ぶ。
例7、例8と例9にも、そのような「提示する部分」が現われている。例文は、次のように示している。ここでは、例文の中の「提示する部分」を黒字で表示する。

例7、しかし、外国人作業員の滞在は長期化しがちで、**家族の呼び寄せ**などから社会的な課題も生まれやすい。

(20010124)

例8、**金のないつらさ**、経済的な基盤が確立していない時の不安をいやというほど味わった。(20010326)

例9、コンセンサス会議が、技術を推進する隠れみのになっては困りますが、**イーターについて市民も参加する形で論議の場をつくり**、社会的な合意の形成に努めてはどうでしょうか。(20010210)

例10、今回の問題では、河川行政のみにとどまらない積極的な議論を望みたい。(20010225)

例11、家族的な雰囲気に満ちていて、**新成人はおくすることなく、本音で話してくれた**。(20010113)

例12、こうした中で、**実の親に代わり**、家庭的な環境で一定期間子供を養育するのが東京都の養育家庭里親制度だ。(20010902)

語基が「社会」である「的」付きナ形容詞を例として説明する。「社会的な」が連体修飾語として用いられる場合に表す会話の含意は、「社会その自体の（課題や合意など）」だけではなく、「社会」に関連するたくさんの事情である可能性がある。しかし、一体どのような事情を絡んでいるのであろう。会話の当事者がどのように推論するのであろう。例7には、「家族の呼び寄せなど」というような具体例を提示する部分がある。例9には、「イーターについて市民も参加する形で論議の場をつくり」の「提示する部分」は、具体的に「社会的な合意」について解釈する。「的」付きナ形容詞を使う文を理解するには、「提示する部分」がその正確な含意を把握するための一つのヒントだと考えてもよからう。

また、使用実態では、「提示する部分」が「的」付きナ形容詞と同じ文に出ている以外に、もう一つの表現タイプがある。つまり「提示する部分」は、前後の文から出てくる。例えば、

例13、時代的な背景が考慮されていないからです。
(20010827)

一見すると例文には「提示する部分」が見受けられない。実はその「提示する部分」は次の文から三行程の長さで詳しく説明してある。原文は以下のように示されているが「提

示する部分」を黒字で表示する。

戦犯の評価は時代とともに（声）

無職 鈴木周太（神奈川県横須賀市 68歳）

10日声欄「戦犯の判決に万雷の拍手が」は、確かに当時見られた光景だったと思いますが、それが多くの日本人の、心からの受け止め方とするには無理があります。時代的な背景が考慮されていないからです。

あのころの日本は、アメリカがすべて正しく、日本はすべてにおいて駄目、全部日本が悪かった、という風潮に覆われていました。食べるのに精いっぱい、落ち着いて物事を判断するゆとりもない時代だったと記憶しています。

先の投稿には「拍手をしなかったのか」とありましたが、では、終戦の玉音放送を聞いて拍手をした日本人が何人いたと思われますか。私も2度戦災に遭いましたが、あれだけ苦しい目に遭わされ、後になって敗戦を喜んだ人だって、敗戦の報には悔しさが先行したはずです。

時が流れ、世の中が落ち着くにつれて色々なことに賛否こもごもの意見が出されるようになりました。戦犯に対する評価も様々であってしかるべきだと思います。太平洋戦争の評価だって、いずれ変わるかもしれません。

一方「的」付きナ形容詞と較べると、「AのB」の場合には、「提示する部分」がほとんど見られない。

例14、自民党政権が社会の変化に適切に対応しなかった結果だ。(20010105)

例15、千鳥ヶ淵墓苑こそ国の施設として十分に整備し、そこで公の戦没者追悼行事をなすべきである。
(20010623)

例16、快復するにつれ、家族の疲れとありがたさに気づくのが実際です。(20010125)

例17、現代の若者たちが暴力的になっていること、そして、暴力的にならなければ自己主張をできない人たちが増えていることを感じてしまったからです。(20010825)

以上の例文で分かるように、「AのB」と比べると、「的」付きナ形容詞は、会話者に大幅な自由を残すような不明確なものである。つまり「的」付きナ形容詞の特性により、「同じ表現から、会話の場面に応じて不特定多数の含意が得られる」可能性が高い。グライス（1998）は会話を協調的なものとする規則として「量の原則」を提示している。すなわちコミュニケーションを円滑に行うためには情報が不足していても、また反対に過剰であっても不適切なもので

ある。この原則を鑑みて考察すると、「的」付きナ形容詞の文中での機能は、前述の「提示する部分」と共に使用することによって、会話あるいは文章中においてふさわしくない情報を排除し、必要な情報を補足するものと考えられる。そうすることによって適切な情報量を提供することが可能になると考えられるのである。

4. 終わりに

本文は、語用論の前提において、「的」付きナ形容詞の文中での前後関係に対する影響を探究する試みの第一歩である。使用実態の観察を通じて、次のような三つの傾向が明確に見えてきた：

- ① 「語基と対立し存在するもう一つの相手」は、必ずしも「的」付きナ形容詞の文に現われないが、「会話の含意」を提示するキーワードとしてよく文章の前後に出てくる。
- ② 文の意味の中心は述部ではなく、「的」付きナ形容詞で表す情報である。
- ③ 「的」付きナ形容詞の語基が強調する特性について解釈したり、提示したりする部分が同一文中、もしくは前後の文脈に頻繁にあらわれる。

以上の傾向を第二言語習得の場面において日本語学習者に提示すれば、「的」付きナ形容詞を使う文を正確に理解するための有益な手がかりになるのではないかと考えている。しかし本文では実際の教育現場での検証はまだ行っていないため、教育現場への応用可能性については今後の課題としたい。

参考文献（五十音順）

- 遠藤織枝（1984）「接尾辞『的』の意味と用法」『日本語教育』53号 日本語教育学会
- 王娟（2004）「接尾辞『的』の機能について」比較社会文化研究 第15号 九州大学大学院比較社会文化学府紀要
- 王娟・曲志強・林伸一（2001）「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴」山口国文第二十四号
- 加納千恵子（1991）「漢字の接辞的用法に関する一考察（4）—AJN 化機能をもつ漢字について—」『文芸言語研究 言語篇』20 筑波大学言語・文芸学系
- 国立国語研究所著（1964）『分類語彙表』国立国語研究所資料集 6 秀英出版社
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓（1982）『言語の構造（意味・統語編）』くろしお出版
- 南雲千歌（1994）「現代日本語の『～的』について—雑誌『中央公論』1992年11月号の場合—」『ICU 日本語教育研究センター紀要 3』国際基督教大学日本語教育研究センター
- 原由起子（1986）「～的—中国語との比較から—」『日本語学』5-3 明治書院

- 藤居信雄（1957）「的ということば」『言語生活』71号 筑摩書房
- 藤居信雄（1961）「的の意味」『言語生活』119号 筑摩書房
- 堀口和吉（1992）「助辞『～的』の受容」『山辺道』36 天理大学国文学研究室
- 丸山千歌（1997）「英語の接尾辞“-tic”の訳語『～的』について—『中央公論』1962年11月号の場合—」『ICU 日本語教育研究センター紀要 6』国際基督教大学日本語教育研究センター
- 山下喜代（1999）「字音接尾辞『的』について」『森田良行教授古稀記念論文集』明治書院
- 山田巖（1961）「発生期における的ということば」『言語生活』120号 筑摩書房
- 羅蓮萍（2001）「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の文章中での使用について」全国語学教育学会山口支部『山口支部研究紀要』第7号
- P. グライス（1998）『論理と会話』清塚邦彦訳 勁草書房

On the Function of the Suffix “-teki” in Japanese

The Impact of Adjectives with “-teki” on Sentences and Articles

Wang Juan

The suffix “-teki” in Japanese is usually considered as complicated in second language education. Due to the elements in their own language it is especially difficult for Chinese Japanese learners to distinguish accurately the adjectives with “-teki” such as “shakai-tekina mondai (the societal (-tekina) issues) from the adjectives with “no” such as “shakai no mondai (the societal (no) issues)” . The pioneering research up until now has all been focused on the linguistic radical “-teki” but no in-depth research has been done on this radical’s impact on sentences and articles. For this reason I believes it is necessary to dig further into this topic and see its implications for Japanese language education.

According to the conclusion in Wang (2004), this paper draws the following three conclusions through the reviewing of the articles that were published in “Voice” column of “Asahi News” (2001) : 1) The counterpart word to the linguistic radical does not always appear in the sentences containing the adjective with “-teki”, but may show up at the beginning or the end of the article if it serves as the key word to illustrate the topic; 2) For sentences containing adjectives with “-teki” the central part of the sentence is the information expressed by the adjective with “-teki” and not the predicate; 3) In sentences with adjectives with “-teki” it is usual that the adjective with “teki” is further described by the sentence.